

神奈川県の特ウゴクヘラオモダカ

勝 山 輝 男

Teruo KATSUYAMA: Notes on *Alisma rariflorum* SAMUELS.

Found in Kanagawa Prefecture

はじめに

トウゴクヘラオモダカはかつてヘラオモダカとは別種として認識されていた。しかし、現在市販されている図鑑類には記述がないが、ヘラオモダカ (*Alisma canaliculatum* A. Br. et Bouche) の葉の細い変種ホソバヘラオモダカ (var. *harimense* Makino) と同一のものとして扱われている。薄葉 (1986) はトウゴクヘラオモダカがヘラオモダカとは別種の *A. rariflorum* Samuels. であることを示した。

筆者は神奈川県植物誌1988の補遺で、植物誌調査で集められた標本の中にトウゴクヘラオモダカが含まれていたことを記したが、今回、旭区川井宿町でトウゴクヘラオモダカの生品を観察することができた。そこでトウゴクヘラオモダカの形態と分布、誤認されていたホソバヘラオモダカやヘラオモダカの狭葉型について報告する。

本稿をまとめるにあたり、栃木県の野口達也氏からは再三にわたってトウゴクヘラオモダカについて御教示をいただいた。心から感謝申し上げる。また、標本の閲覧を許して下さった国立科学博物館、横須賀市自然博物館に御礼申し上げる。神奈川県内のたくさんの標本を集めてくださった神奈川県植物誌調査会会員の方々にも感謝する。

神奈川県における研究の経緯

トウゴクヘラオモダカが文献に登場するのは、松村 (1905) がはじめてである。当時はトウゴクヘラオモダカに *A. plantago* L. をあて、ヘラオモダカを変種 var. *angustifolium* に、サジオモダカを var. *parviflorum* にしている。牧野・根元 (1931) でも同様に扱われている。

1932年に G. Samuelsson が日本特産の新種として

A. rariflorum Samuels. を発表した。沢田 (1935) は箱根町仙石原で採集した *Alisma* が *A. rariflorum* であることに気付いていた。このときの標本は神奈川県立博物館に保管されており、沢田の自筆で *Alisma rariflorum* G. Samuelsson in Arkiv för Botanik, Band 24 A, No. 07 s. 32 Taf. 3 (1932) と記されている。

神奈川県植物目録 (1933) にはトウゴクヘラオモダカの記述はないが、神奈川県植物誌 (1958) や箱根植物目録 (松浦, 1958) ではトウゴクヘラオモダカを *A. rariflorum* としている。横須賀市自然博物館には大谷茂がトウゴクヘラオモダカと同定した標本が残されているので、1958年当時本種は正しく認識されていたことがうかがえる。

しかし、その後の我が国の植物誌や図鑑では前述したように、記述がないが、ヘラオモダカの変種ホソバヘラオモダカと混同されるようになってしまった。

最近になって、薄葉 (1986) はトウゴクヘラオモダカが *A. rariflorum* であることを明らかにし、その形態と関東を中心に本州に広く分布していることを示した。

神奈川県植物誌 (1988) で筆者はトウゴクヘラオモダカはホソバヘラオモダカと同一種であるとし、後述するヘラオモダカの狭葉型にあててしまった。その後植物誌調査で集められた標本の中に、トウゴクヘラオモダカ *A. rariflorum* と同定される個体が含まれていることが明らかになったので、補遺で追加訂正した。

トウゴクヘラオモダカの形態

トウゴクヘラオモダカとヘラオモダカの区別でもっとも簡便なのは、花序の最下側枝が2本しかないことである (図1, 2) が、花の構造にも違いがある (表1, 図3, 4)。

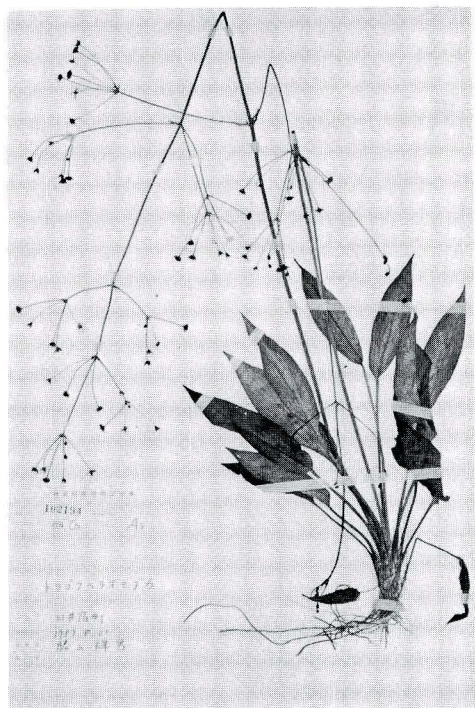


図1 トウゴクヘラオモダカの標本（最下の側枝が2本しかない。葉はヘラオモダカと比較してけっして細くはない。横浜市旭区川井宿町で1989. 8. 20 採集）



図2 ヘラオモダカ（狭葉型）の標本。（最下側枝は3～4本でているのがわかる。葉は細く、脈は3本。川崎市麻生区黒川で1989. 8. 16採集）

表1 トウゴクヘラオモダカとヘラオモダカ（狭葉型）の花の比較

	トウゴクヘラオモダカ	ヘラオモダカ（狭葉型）
萼	長さ2.5mm	長さ1.5mm
花卉	長さ5mm で先は不齊の鋸歯縁	長さ3mm で先は波状縁
葯	黒緑色で長さ1mm	黄緑色で長さ0.5mm
花粉	黄色	黄色
花糸	長さ2mm	長さ1mm
子房	全体の長さ1mm 幅0.8mm	長さ0.8mm 幅1.2mm
柱頭	長さ1.2mm	長さ0.5mm

柱頭の長さが長いことや、葯が細長いことなどで、開花株を標本にしてあれば、花卉がくしゃくしゃで、葯の色がわからなくなっても区別できる。花卉の先が鋸歯になることが区別点とされることもあるが、ヘラオモダカでも波状の鋸歯があるので、この点で区別するのは危険である。葉はけっしてヘラオモダカと比較して細くはない。花期は8月下旬～9月。薄葉

（1986）が指摘しているように、開花時間は午後2時頃から夕方までで、午前中には開花していない。

トウゴクヘラオモダカについて図示してある図鑑類はこれまでにないが、原色日本野外植物図譜（奥山，1964）の6巻P L. 501の図は最下側枝が2本しかなく、トウゴクヘラオモダカである。この標本は国立科学博物館にあり、確認することができた（白河南湖公



図3 トウゴクヘラオモダカの花。(葯は黒緑色で長さ1 mm。花弁も長さ5 mmと大きい。横浜市旭区川井宿町で 1989.8.20 撮影)

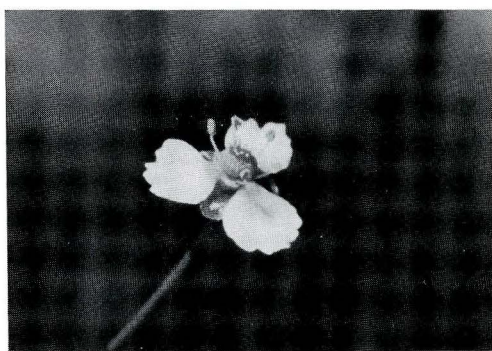


図4 ヘラオモダカ(狭葉型)の花。(葯は黄緑色で長さ0.5 mm。花弁は長さ3 mm程度。川崎市麻生区黒川で 1989.8.16 撮影)



図5 神奈川県におけるトウゴクヘラオモダカの分布図

園, 1958.7.30, H. Utsumi, 308360(TNS))。

神奈川県内の分布

神奈川県産のトウゴクヘラオモダカの標本で筆者が確認できたものは次のとおりである。

旭区川井, 1984.9.14, 勝山輝男, 県博植物誌標本
旭区川井宿, 1989.8.20, 勝山輝男, 県博植物誌標本
城山町穴川, 1984.9.8, 勝山輝男, 県博植物誌標本
旭区上白根, 1960.8.5, 斎藤 照, 横須賀市博
城山町川尻, 1967.8.1, 守矢淳一, 横須賀市博
箱根町仙石原, 1928.7.17, 沢田武太郎, 県博
旭区北部と城山町北部に自生しており, 箱根町仙石

原には少なくとも過去に自生していた(図5)。

旭区川井宿町や城山町の自生地は谷戸奥の湧水のあ
る湿地であった。川井宿町の自生地にはサワシロギク
やコオニユリが見られる。サワシロギクやコオニユリ
は神奈川県では箱根仙石原にあり, 平地ではほとんど
見られない。トウゴクヘラオモダカはヘラオモダカよ
りも冷たい水を好むようだ。

トウゴクヘラオモダカは図鑑類に記述がないので,
一般にはほとんど認識されておらず, 今後神奈川県各
地で発見される可能性がある。

ホソバヘラオモダカとヘラオモダカの狭葉型について

トウゴクヘラオモダカが明らかになったので、ホソバヘラオモダカの実体が問題になる。植物学雑誌や植物研究雑誌を調べたが、ホソバヘラオモダカ *A. harimense* Makino) の原記載は見当たらない。牧野；新日本植物図鑑(1963)には、ホソバヘラオモダカ (*A. canalicuratum* A. Br. et Bouche var. *harimense* Makino) は、葉は線状、支脈2~4で、花卉前縁には鋸歯があり、基部白色、葯は褐紫色とある。

この記載から判断するかぎり、トウゴクヘラオモダカとの区別はつかない。ホソバヘラオモダカはトウゴクヘラオモダカと同一のものである可能性もある。那須の植物誌(1971)では、*A. canalicuratum* var. *harimense* をトウゴクヘラオモダカのシノニムにしている。

関東地方北部には葯の褐色のものがあるという(野口達也、私信)が、それが真のホソバヘラオモダカの可能性もある。

ヘラオモダカの葉の支脈は普通4本以上ある。ところが図2に示すように葉がきわめて細く、支脈が2本しかなく、葯の色が黄緑色のものがある。筆者は神奈川県植物誌(1988)でこれをトウゴクヘラオモダカ(ホソバヘラオモダカ)としてしまった。トウゴクヘラオモダカとホソバヘラオモダカが同一種であるとしている場合(北村ほか、1980; 杉本、1973)、この植物をさしている可能性がある。

葉の幅はヘラオモダカと区別しにくいものもあるので、この葉の細いヘラオモダカはヘラオモダカの葉の幅の変異のうちに含まれるものと考ええる。

以上述べたようにホソバヘラオモダカ (var. *harimense*) は①トウゴクヘラオモダカのシノニム、②神奈川県にはない別の植物、③ヘラオモダカの狭葉型に対する名称の3つの可能性があるが、原記載が見当たらないので、現段階ではその判断はつきかねる。従って神奈川県に産するものはトウゴクヘラオモダカおよびヘラオモダカの2種と把握しておくのが妥当である。

おわりに

最近、日本自然保護協会より「我が国における保護上重要な植物種の現状」の報告書が出された。その中には平地の湿地に生える植物が多く含まれている。ホシクサ科、カヤツリグサ科、イグサ科、ヒルムシロ科、ミクリ科の植物などは分類も難しいためか、図鑑

などの解説にも不備が目立つ。トウゴクヘラオモダカも市販されている図鑑類には載っていない。十分な分類学的な検討や分布調査もされずに、姿を消してしまう植物もあるにちがいない。減少の激しい、平野部の湿地の保護が急がれる。

文 献

- 神奈川県博物調査会編、1933. 神奈川県植物目録. 5 + 111 + 23pp., pls. 10, (ref. p. 100). 横浜.
神奈川県博物館協会編、1958. 神奈川県植物誌. 3 + 257pp., pls. 8, (ref. pp. 30-31). 横浜.
神奈川県植物誌調査会編、1988. 神奈川県植物誌1988. 1442pp., (ref. pp. 202-203). 横浜.
北村四郎・村田 源・小山鐵夫、1980. 原色日本植物図鑑Ⅲ(改訂版). 4 + 465pp., pls. 108, (ref. p. 396). 保育社、東京.
牧野富太郎、1963. 牧野新日本植物図鑑. VI + 1 + 12 + 1060 + 77pp., pls. 5, (ref. p. 698). 北隆館、東京.
牧野富太郎・根本莞爾、1931. 改訂増補日本植物総覧. 7 + X + XIX + 1936 + 3pp., (ref. p. 1288). 春陽堂、東京.
松村任三、1905. 帝国植物名鑑下巻顕花の部前編. VII + 315pp., (ref. p. 30). 丸善、東京.
松浦茂寿、1958. 箱根植物目録. 4 + 1 + 2 + 7 + 90 + 2 + 25pp., pls. 3, (ref. p. 72). 箱根博物会、小田原.
奥山春季、1964. 原色野外植物図鑑(6). 2 + 180 + 19pp., pls. 87, (ref. pl. 501). 誠文堂新光社、東京.
大井次三郎、1956. 日本植物誌. 2 + V + 1383pp. 至文堂、東京.
大井次三郎、1965. 改訂新版日本植物誌. 4 + 1560pp., pls. 57. 至文堂、東京.
沢田武太郎、1935. 箱根植物雑誌(3). 植物研究雑誌, 11: 522-523.
生物学御研究所編、1972. 那須の植物誌. 8 + 395pp., 73, (ref. p. 60). 保育社、東京.
杉本順一、1973. 日本草本植物総検索誌. 単子葉編. 630pp., (ref. p. 24). 井上書店、東京.
薄葉満、1986. トウゴクヘラオモダカについて. 水草研会報, 25: 16-19.

(神奈川県立博物館)